

尾杉SS再録集

千里

◇猫の日

◇ペトリコール

◇星の話

◇約束

◆共犯者になる尾杉の話【不穏】

◆涅槃は遠い【死ネタ】

尾形百之助にとって、今日はなんてことない一日だった。出来の悪い部下の尻拭いをし、意地の悪い上司の機嫌を取って一日が終わった。そもそも二月は二十八日までしかない。月末近くになって溜まった業務のせいで、尾形は二徹明けだった。早く家に帰って寝てしまいたい、尾形の思考はそれが九割を占めていた。しかしそんな時こそ邪魔が入るのが世の常である。マンションの一室、尾形が住んでいる部屋の明かりがついていた。

（なんで、よりにもよって今日なんだ）

尾形には前世の記憶があり、約一年前に同じ記憶を持った杉元佐一と出会った。前世で数回体を重ねる仲だった二人は、今世でも似たような関係に落ち着いた。その流れで尾形は杉元に合鍵を渡していたのだ。眉間に皺を寄せながら尾形はエレベーターに乗り込む。

（最近会ってなかったな。あいつには悪いが早めに追い出すか）

尾形はとにかく眠かった。上と下のまぶたが磁石のように引き付け合っている。止まったエレベーターから降り、おぼつかない足取りで部屋を目指す。

自室の玄関先に立った時、尾形の耳に話し声が聞こえてきた。発信源は部屋の中だ。チツと盛大な舌打ちを響かせながらドアノブに手をかける。不用心なことに鍵がかかっておらず、尾形が扉を開けると酒の臭いが漂ってきた。

「あゝ！おかえりい、尾形ちゃん」

廊下に面したトイレから出てきたのは、尾形にとって見知った人間だ。

「……てめえ、白石。他人の家で何やってんだ。サツに突き出すぞ」

「やだあ、失礼しちゃう！ピッキングとかはしてないぜ！」

白石の言動は酔っ払いそのものだ。氷のように冷たい視線を向ける尾形の肩に、白石が腕を絡める。

「まあまあそう怒んなって。ちゃんと杉元もいるからさ」

尾形は白石を無視して廊下を進み、リビングのドアを開けた。

「もおお、遅いよおお、おがたあゝ」

ぐでんぐでんになった杉元が、机にしながら尾形を見ている。その机の上には缶ビールやチューハイの空き缶が沢山転がっていた。

「しらいしい、おそかったな。オソマカ」

「そうなのよお、すっごい長いの出た」

「長い？」

「長い」

杉元と白石が声を上げて笑う。尾形は今にも失神しそうだ。

「お？大丈夫だよお。これぜえーんぶ買ってきたやつ。尾形ちゃんちの冷蔵庫には手を出してないぜえ」

白目を剥く寸前のような尾形をいたわったのか、白石が何の意味もない追加情報を出

す。

「おがたあ、お前何食って生きてんの？冷蔵庫の中、まあじで空っぽじゃん」

結局中は見たんじゃねえか。そう尾形が言う前に、杉元が背後からどデカイ黄色のビニール袋を取り出した。

「そうだろうと思ってえ、ド○キから食べ物買ってきました！ないすたいみんぐう！」
「ひゅーひゅー！」

勝手に盛り上がる酔っ払い二人に言い返す気力は、二徹の尾形にはもう残っていない。突っ込む元気さえなく、尾形はその場で棒立ちになる。

「えっとねえ、カップラーメンと、鍋で作るラーメンと、チンして食べるラーメンと……。あれえ、ラーメンだらけになっちゃったあ」

ケラケラと杉元が笑う。インスタントラーメンが所狭しと机上に並べられた後で、杉元は袋の一番下から黒い何かを取り出した。

「おがたあ、今日何の日か知ってるう？」

「知らん」

即答した尾形に機嫌を損ねることもなく杉元はにこにここと笑っている。

「今日はねえ、二月二十二日だから猫の日なんだぜえ」

「なんでだ」

「「にやんにやんにやんの日だから！」」

白石と杉元が招き猫のようなポーズをする。尾形は心底呆れた目を向けた。

「で、杉元が持っているのはなんだ」

「これは……、こうする、のっ！」

雑に開けられた袋から黒い猫耳カチューシャが登場し、それを取るやいなや杉元は尾形の頭に装着させた。

「やっぱ似合うー!!お前猫っぽいもんなあ！」

「黒にして正解だったねえ!違和感全然ないじゃーん！」

酔っ払い共が笑う。笑う。尾形の目尻がぴくりと動いた。笑い転げている二人は気付いていない。

「……そうか、猫の日か。杉元、袋にまだ何か入っているよな」

「んゝ、これ?付ける？」

杉元が取り出したのは黒い毛並みをした細長いしっぽだ。腰に巻いて固定するのだろ。片側の先端部分にはリボンがついていた。尾形は無言でそれを受け取り、踵を返す。リビングから出ていったと思えば直ぐに戻ってきた。黒いしっぽが持ち手に結ばれたアダルトグッズをその手に持って。

酔っ払っていた二人の顔がたちまち正気に戻る。

「え……、尾形さん……?それ何？」

おずおずと杉元が問う。尾形のこめかみにビキビキと血管が浮き出た。

「猫だ猫だうるせえんだよ。ネコはてめえだろ、杉元佐一。喜べ、今日はこいつで相手してやる」

尾形が手元のスイッチを押すと、その卑猥なブツはうにょんうにょんと動き始める。

「お前のケツにこいつを突っ込んで、尻尾が動く所を見ていてやるよ」

尾形は頭に装着された猫耳を外し、衝撃で縮こまっている杉元の頭に着け直した。

「よく似合うじゃねえか」

「じ、辞退という選択は」

「据え膳食わぬは男の恥ってな」

不規則な動きをするバイブを持ち、尾形は杉元に笑顔を向ける。それを見て杉元は身震いした。

「し、しら」

「白石は、これから用事があるんだよな」

「へあつ、俺えっ!？」

突然振られた言葉に白石が驚く。いつの間にか杉元の体は押し倒され、床に仰向けになっっていた。その上に尾形が乗り、全体重をかけて杉元を押さえ込んでいる。ぎりぎりと音が鳴りそうな程強く押さえ付けているにも関わらず、尾形は据わった目で白石を凝視していた。

「用事、あるんだよな」

「あ、ありますっっ!!今できましたっ!!」

最低限の荷物をかき集め、白石は逃げるようにリビングから出ようとする。

「ちよっ!!白石!!」

「ごめんな、杉元。無事を祈ってるぜ！」

無慈悲にもリビングのドアが閉じられた。

「さて、やるか」

「うわーっ!!最低!変態!!人でなし!!」

「ははあ、俺は猫みたいなんだろ?たまにはこんなプレイもいいよな」

「意味分かんない!!さてはお前また徹夜したな!?もう今日は早く寝ろよ!!」

「だめだ。勃った」

「~~~~っ!!バカ尾形アア!!」

白石が外に出ると雪が降っていた。立春を過ぎたとはいえまだ冬だ。吐く息は白いもやを作っては消えていく。

「今日の月ほっそいな」

心許ない月明かりが道を照らす。杉元の体、特に下半身、もっと言えば尻穴が無事でありますように。白石は一人、寒空に願ったのだった。

雨降って、街に色とりどりの傘が咲く。

黒、紺、透明、花柄。小さい、大きい。あ、あれは多分折りたたみ傘。

久しぶりの土砂降りだ。人が蹴って弾けた水滴が地面で跳ねる。アスファルトに打ち付けられた雨粒が、激しく鳴っている。

建物の軒下で、一人それを眺めていた。シャッターの目立つ街並み。どこか廃れた雰囲気、雨の漂う小さな商店街の一角。既に閉店した店の軒先で、雨が止むのを待っていた。

『今日は雲が多く、にわか雨の可能性ががあります。お出かけの際には折りたたみ傘を忘れずに』

今朝のニュースを思い出す。にわか雨を甘く考えていた。いざとなれば走ればいいと、折りたたみ傘は玄関に置いてきてしまった。

「いける……かな？」

呟いたはずの言葉も、耳に入る前に雨音が攫っていく。びしょ濡れになる覚悟をしなければならぬ。玄関に着いたら、同居人はどんな顔をするだろう。思いつき顔を顰めながらタオルを投げてくるかも。そしてありったけの嫌味を言われるに違いない。自

分の想像に笑ってしまった。だってあまりにもはっきりその光景が目には浮かぶから。嫌味を言いながら、どこか楽しげに弧を描く口と目。俺に投げたタオルの向こう側で、あいつはきつと心底安心した顔をしている。

「あーあ」

いつの間にこんなに絆された？ いや、俺も大概か。買った二人分のアイスが溶ける前に早く帰ろう。意を決して雨粒の弾幕に飛び込もうとした。

「おいコラ。脳筋野郎」

激しい雨音の中でもやけに通る声だ。真っ黒で大きな傘の下、これまた真っ黒な目が俺を見ていた。

「走って帰るつもりだったろ。ああ、バカは風邪ひかないって言うから大丈夫か」

せせら笑った尾形に俺も笑い返してやる。ここまでお互いのめり込んでいたんだな、俺たち。二人でいることの心地良さを知ってしまえば、もう一人には戻れない。呪縛みたいな幸せに、溺れて、沈んで、その中でしか息ができなくなるのが俺たちの運命だ。

「何笑ってたんだ。気持ち悪い」

「ええー、酷くない？」

「それだけよこせ。お前は濡れろ」

「嫌ですー。アイスが欲しけりや俺を傘に入れろ」

「それが人にものを頼む態度か」

「アイスは俺が金払ったんだけど？」

深いため息を吐き切ると、尾形は俺の腕を掴んで傘の中に引き入れた。成人男性が二人肩を密着させれば何とか濡れない。触れた尾形の手は熱かった。俺の体が冷えているのか。今になって急に寒気が襲ってくる。

「帰ったら」

尾形が呟いた。どれだけ雨音が酷くても、尾形の声だけは真っ直ぐ俺の耳に届く。

「家に帰ったら、風呂入れ。沸かしてある」

尾形なりの気遣いだろう。それが微かにこそばゆくて、なぜか胸がむずむずする。いつかこの感情も感覚も全部、言葉に出来たらいいのに。もどかしい思いを抱えながら、自分自身を落ち着かせるように深呼吸した。雨に濡れた土とアスファルト、澄んだような混ざったような複雑な匂いが肺を満たしていく。

土砂降り、真っ黒な傘、少し水が染みた靴、肩から伝わる体温、そして雨の匂い。この瞬間は、きっと俺の宝物になる。

「人が死んだら星になるんだって」

都会の明るい夜空でも、煌々と光る一等星。ゆれる指先で示しながら、前を行く背中にそう言った。

まだ酒が抜けていない。今日は飲み過ぎた。尾形が、仕事帰りに珍しく誘うから。舞い上がって、切り上げるタイミングを逃したんだ。尾形が足を止め、振り返る。どうせ幼稚だなんだの言って笑うんだろ。身構えた俺の前で、尾形は少しだけ赤い頬をゆるめて「一理ある」なんて言いやがった。それから元素がどうか、化学構造がどうか話し始めたから、俺はまた空を見上げた。

一際明るい星が、ちかちか輝く。あれは確か金星、だったかな。前に尾形が教えてくれた。宵の明星、こんな街中でも大体見える、一番星。それから小さくて細かいやつがぽつぽつと。嘘みたいに大きな月が、小さな光をかき消して、なんだかもったいない。

「おい、聞いてんのか」

やたら難しい言葉を並べていた声が、急に俺に向けられる。適当な相槌を打ってやれば、満足げに「ふん」と息をついた。お前も相当酔ってんね。

「もし、俺が死んだらさ。お前は探してくれる？」

酔狂ついでの与太話。数え切れないほどの星の中から、俺という星を、お前は見つけてくれるだろうか。言ってから何となく恥ずかしくなって、動きが止まった尾形の肩をばしばし叩いた。冗談だよ、別に、死んだ後まで腐れ縁を持ち越そうなんて考えてない。そう言っただろうと思ったのに、お前が、見たことない顔で俺を見るから。

「探さない。お前はそこに居ないのに、探す必要なんてないだろ」

真っ黒な目が細められて、瞳の奥で静かな炎がゆらめく。吹けば消えそうな頼りない明かりだ。普段は見えないそれが珍しくて、ちょっとだけ驚いた後に文句を言っただけ。

「そこは探してよ。ロマンチックって言葉知らないの」

「知るかよ」

酔いが覚めた、と言いながらまだ覚束ない足を引きずって、尾形は前を歩いていく。

酒の匂いがふわりと香り、夜の空気にはどける。けれど俺は聞いてしまった。ぼそり呟いた尾形の低い声。それが紡ぐ言葉は

「お前が死んだ後なんて、考えたくもない」

今度こそしっかり驚いて、数秒前の心地よい酔いがすっ飛んだ。言葉はもう、ぬるい空気に溶けてしまった。そもそも意識して言ったことなのか、それとも無意識に呟いた？ この際どちらでもいい。尾形の口からその言葉が出てきたことが、ただ純粹に嬉しい。死んだ後を考えたくないってことは、どっちかが死ぬ直前まで、一緒に居れるってことだろ？ なんだそれ。とんでもない爆弾発言のくせして、本人はケロッとしてるのが気に食わない。だから早足で追い抜きざま、言っっちゃった。

「俺、尾形が死ぬまで死ぬつもりないから」

は？　と言わんばかりに大きく開いた口と目。そうしてると本当に猫に似てるな。開いた口がだんだん震えて、顔が更に赤くなつて、変な体勢で固まってしまう。

やっと気付いたの。遅いよ。

何かを叫ぶ尾形の声を背に、星降る夜道を駆け出した。

最近よく見る芸人が、テレビの小さい画面の中でネタを披露し、どっと笑いが起こる。これの何が面白いのか。正月で暇だから仕方なくテレビをつけているだけだ。隣に座る同居人は阿呆面でミカンを頬張りながら、きやらきやら笑っている。こいつとは根っこから感性が違うらしい。しまいには「尾形も見ろよ。面白いから」なんて言いやる。俺には全く理解できなかったので、炬燵に潜って寝たふりをした。

笑い声が聞こえなくなったタイミングで顔を出す。真正面に杉元の顔があって驚いた。金にも橙にも見える目が穏やかに俺を見つめる。

「起きた？ 切り餅食う？」

「……食う」

「りょーかい」

杉元は立ち上がり台所に消えていった。成人男性二人が入るには狭い炬燵だ。杉元が出て広くなったはずなのに、なぜか寒く感じる。背後からチンとトースターの音がした。

「しょうゆ？ きなこ？」

「きなこ」

二人分の皿を持ち、杉元が戻ってくる。

「どーぞ」

「ん」

目の前に置かれた皿には焼いた切り餅二つと、きな粉が山のように盛られていた。これは気をつけないと粉が飛ぶ。

「杉元の、しょうゆか」

「しょうゆに砂糖混ぜたやつ。あまじょっぱくて

美味いぜ」

「俺もそれが良かった」

「食い終わったら作ってやるよ」

言いながら杉元は切り餅を頬張り「ヒンナヒンナ」と呟く。元旦なんだ、アシリパの所へは行かないのかと問えば、あの子には家族がいるからと突っぱねられた。杉元に家族はいない。俺も実家に帰りたくない。平和なこの時代に生まれても、俺たちは結局あの時のまま。

きな粉を吹き飛ばさないよう、細心の注意を払いながら餅を頬張る。粉っぽい甘さが口内に広がって唾液が出た。焼き加減も上々だ。

「美味しい？」

頬杖をつきながら杉元が問う。俺が無言で頷けば、杉元は嬉しそうに、満足そうに笑ってみせた。テレビの音が小さくなり、昼時のニュースが流れ始める。正月だからといって全てのニュースがめでたいとは限らない。神妙にテレビを見ていた

杉元の口から、思わぬ言葉が滑り落ちる。

「来年もこうしていれるかな」

真意を図りかねて杉元を見るが、ただただ透明な目がテレビを眺めているだけだった。

「元旦は嬉しくて、少し苦しくなる。無事に一年越した嬉しさと、来年はどうだろうって思っちゃもう」

杉元が俺を見る。金が揺らいで、今にも落ちそうだ。

「なあ、尾形」

杉元がいない正月を想像する。俺は一人で、テレビもつけず、餅も食わず、炬燵にうずくまっているだろう。笑い声も聞こえない、トースターの音も聞こえない、そんな場所にいるはずだ。考えて身震いした。そんなもの、一生味わいたくない。「尾形？」

「このド阿呆め」

「は？ 喧嘩？」

買うよ？ などと言ってファイティングポーズを決める杉元を押し倒す。驚きで見開かれた橙と目が合った。

「なに難しいこと考えてんだ。普段は脳筋のくせに」

「さっきから喧嘩売ってんの？」

「売ってねえよ。ド阿呆。お前がくだらねえこと考えてるのが悪い」

「くだらない、ってお前さあ……」

「くだらねえよ。来年も、再来年も、ずっと俺はお前に付き纏うぜ。やっと見つけた獲物だからな。そう簡単に手放してたまるか」

歪んでいた杉元の顔が一瞬固まって、耳からどんどん赤くなる。

「わ……、ちょっ、今のは反則」

「知るかよ」

顔を隠そうとした腕を取り除き、唇の横を舐める。ひいっ、と情けない声が鳴って思わず口角が上がった。

「あまじょっぱい。美味しいな、これ」

口の端についたタレを舐めたただけだ。何を期待したんだという目を向ければ、杉元の顔が分かりやすく怒りに染まる。

「ふっつぎけるな！ バカ尾形！ 助平!!」

「ははあ」

本格的に暴れ始めた不死身に適うはずもなく、簡単にひっくり返され形勢逆転だ。一発くらいくらうか、目を瞑り待てども衝撃はこない。薄く目を開けて見れば、杉元は俺の胸ぐらを掴んで俯いていた。

「やくそく……」

「あ？ 聞こえねえ」

「約束！ ……しろよな」

やけに弱々しい声に毒気を抜かれる。胸ぐらを掴む手は僅かに震えていた。

「置いてかねえよ。そんなに俺が信用ならねえか」

「信用ねえだろ。前は勝手に目の前で死んだくせに」

前の話を持ち出されると耳が痛い。こいつ、それを知って言ってるな。

「……分かった。約束だ」

「おう」

手が離れていく。杉元は炬燵に座り直し、金に光る目を瞬かせて笑った。

「餅、固くなるまえに食べようぜ」

非現実的な事なんて世の中には溢れている。現実から一步足を踏み外せば、あとは泥沼。戻ることなんかできやしない。

ざくり、地面にスコップを突き立てる。最小限の光源と土を掘る音、そしてお互いの潜めた息遣いだけが全てだ。

「まだ？」

「まだだ」

もう一メートルは掘ったのではないか。土の湿った匂いが鼻をつく。掘っている穴の横にはビニール袋に包まれた《何か》。百六十センチくらいのそれは、どこからどう見ても人型である。頭のようなでっぱりから続く肩のライン、端にくにつれて細くなる足のようなシルエット。それに加えて重い。ちょうど大人一人分くらいの重さだ。

真っ暗な闇の中、山奥で男二人が無心に穴を掘っている。異様な光景だった。

「もういいだろう」

荒い息を抑えながら尾形が言う。それを聞いて杉元も手を止めた。

「で、どうするの」

杉元の平たい声が地に落ちる。

「分かってんだろ」

尾形は言うやいなやビニール袋に包まれた《何か》を足で穴に蹴落とした。ど
さりと鈍い音が鳴る。

「土、被せるぞ」

返事はせずに杉元は掻き出した土を被せ始めた。尾形もそれに続く。
静かだ。まるで世界に二人だけ置き去りにされたような。

ざくざく、ざっ、ざっ――

この時間が永遠ならどれほど良かっただろう。実際に現実を置き去りにしたの
は紛れもなく二人。非現実陶酔したふたつの影を、月だけが見ていた。

杉元が、事故に巻き込まれた。

正直なところ、またかと思った。いつも何か無茶をして、生傷が絶えない男だ。骨折ったかも、なんて笑いながら電話をかけてくるようなやつだから、今回もか、と思ってしまった。

楽観的な考えとは裏腹に、電話口の声は震えていた。聞き慣れない声だ。杉元は「幼なじみに会った」と言って出掛けたから、こいつはその「幼なじみ」に違いない。憶測が妙に冷えた頭を過ぎった。過呼吸を起こしそうなほど揺れる声。後ろでは大勢の話し声と女の叫び声が聞こえた。

さいちちゃん、さいちちゃん、めをあけて、おねがい、おねがい。

ただならぬ喧騒に、背筋を冷たい汗が伝っている。しばらくして、けたたましいサイレンが電話

越しに鳴り響いた。未だ混乱状態の相手から搬送先の病院を聞き出し、玄関を飛び出した。

病院までの道中は、とても長く感じた。赤信号をこれほど恨んだのは初めてだ。病院の受付で同居人の名を口にする、受付の女は一瞬怪訝な顔をして奥に引っ込んでしまった。再び戻ってきた時、女の隣には白衣を着た男がいた。年配の、背の高い医者が眉間に皺を寄せながら「杉元さんのご家族の方ですか」と言う。家族ではない。籍も入れられない。同居人、そう、ただの同居人なのだ。迷いに迷った末、「友人です」と絞り出した。すると医者は顔をくしゃりと歪め、案内板の地下を指さした。

杉元さんはここに居られます。けれどお身体は、

見ない方が良い。

医者の方が遠くで聞こえた。

全てが霞の向こうのようで、現実味がない。小さな部屋の中心に、男の体が横たわっていた。真っ白なシートで体を包まれ、面布によって顔すら見えない。唯一見える髪色は、見知ったもので吐き気がした。

男と女が遺体にすがりついて泣き叫んでいた。

どうして、どうして俺なんかを庇ったんだ。

なんでお前が死ぬんだ。

いやだ、さいちちゃん。なんで、どうして。

耳を塞ぎたくなるほどの慟哭を、俺はただ黙って見ていた。女の腹は大きく、男の腕や頭には包帯が巻かれていた。

杉元佐一の葬儀は滞りなく行われた。肉親を喪っていたため、遠い親戚筋の人間が喪主を務めていた。俺は、友人としての参加だった。棺に納められる時も、あいつの顔と体は花で隠されて見えなかった。杉元佐一は、幼なじみの男を庇って死んだ。幼なじみの女と男は夫婦で、女はもうすぐ臨月を迎える頃だった。歩道に突っ込んできた車と後ろの壁に押し潰されたらしい。ブレーキ痕はなかったそう。顔も、体も、めちゃくちゃで、ほぼ即死。だが確かに、幼なじみに向かって笑いかけたらしい。無事で良かった、と、安堵した顔で。

少女が泣き叫んでいる。お前が大事にしていた子だろ。泣かせていいのか。慰めに来いよ。少女の肩を強く抱き寄せる坊主頭も、顔を歪めて泣いていた。会社の上司を名乗る彫りの深い男が、遺

影を見て「ばかやろう」と呟いた。金持ちの坊ちゃんとお付きの小柄な男が、棺の前で静かに手を合わせた。どこから聞きつけたのか、老若男女様々な人間が「杉元佐一」を送るために集っていた。

涙の一滴も出ず、淡々と葬儀の流れを見送った。あいつと過ごした日々は、少しだけ人間らしい感情を持てた気がしたのに。悲しいのか、辛いのか分からない。ただただ現実味がない。目を閉じれば直ぐに覚める夢ではないのか。やっぱり、俺は欠けた人間なのだ。涙を流すなんて、そんな人間らしい行動すらできない出来損ない。あいつは、こんな俺を見てどう思うだろうか。一端の人間になれるよう、道化同然に感情を知ろうとした俺を、あいつは馬鹿みたいだと一蹴するだろう。そして肩を叩きながら笑うのだ。きっと、あいつならそ

うする。

遺体が荼毘に付され、あいつは、白い骨だけを遺していなくなった。

千里

部屋には、杉元のもものが沢山残っていた。

帰ってきたら食べるつもりだった菓子。脱ぎ捨てたままの服。毎日使っていたダンベルと、まだ半分も残っているプロテイン。時計の針は午後六時を回っていた。いつもあいつが帰ってくる時間だ。鍵の音は鳴らない。ただいま、という脳天気な声も聞こえない。時計の針は無情にも時間を刻み続けて、午後七時を指し示す。コップを無意識に二つ出しては、あいつがもう居ない事実打ちのめされる。玄関の先で物音がする度、有り得ない期待を胸に忍ばせ見に行ってしまう。狭い玄関にはまだあいつの靴が残っている。靴はあるのに、なぜ居ない。頭では分かっている。けれど心が追いつかない。

一人きりで風呂に入り、寝室へと向かう。大きなベッドに身を沈めれば、あいつの匂いがした。

「……っあ」

気付いてしまえば、無理だった。これは現実だ。あいつが、杉元佐一が居ない世界に、俺は取り残されてしまった。琥珀の目はもう俺を映さない。やけに高い体温も、俺を呼ぶ低い声も、もうここにはない。顔が火照って、目頭が酷く熱い。流れる液体のせいで、視界がぼやけてちかちかする。まだ、俺は泣けたのだと、どこかズレたことを思いながら、たった一人の寝室で、子供みたいに泣きじゃくった。

千里